

その昔、ある村では夜になると、空は黒い布をかけたように真っ暗でした。というのも、お月さまは決して昇らず、またどんな星もはっきりとは輝いていなかったからなのです。神様が世界をお創りになられたときに、夜のための光がすこし足りなかったのです。

あるとき4人の若者が、この村から旅立ち、よその村に着きました。そこでは、山の後ろにお日さまが沈むと、輝く球が樫の木につるされました。それはお日さまほど明るくはありませんでしたが、柔らかな光であたりを照らし、なんでも見分けられる程でした。

若者たちは、近くを通りかかった農夫に尋ねました。「あれはお月さまです」と農夫はこたえます。「村長が、3ターレルで買ってきて、樫の木につるしたので。そして、毎日それに油を注ぎ、磨きます。村長はその見返りに、毎週1ターレルを受け取るのです。」

農夫が去ると、若者の一人が言いました。「このランプは役立ちそうだ。うちの村にもこれくらいの樫の木があるから、それにぶら下げることができるな。夜の暗闇で探りまわなくてよいのはありがたいな！」すると、二人目の若者は「それじゃあ、このお月さまをいただく！。この村では別のを買えばよい！」そして「木登りは得意だ！、あれを降ろしてこよう！」と、三人目が木に登り、四人目は荷馬車を探して来ました。

月にロープをつなぎ、樫の木から降ろすと、若者たちはお月さま荷馬車に乗せ、見つからないよう布で覆い隠しました。そして、無事に自分たちの村に運び込み、高い樫の木にそれをつるしました。

すると、その光は村中を照らし、家々の寝室も居間も光で満たしました。年寄りや若者はとても喜びました。岩山の小人も洞窟から出てきました。赤い服を着た小さな妖精たちは野原で輪になって踊りました。

四人の若者は、お月さまに油を注し、“しん”を掃除して、毎週1ターレルを受けました。しかし、彼らがやがて年をとり、ひとりが病気になりました。そして、もうじき死ぬのだと分かると、お月さまの四分の一は自分のものなのだから、墓と一緒に埋めてくれと言いました。

彼が死ぬと、村長は樫の木に上り、植木ばさみでお月さまの四分の一を切り取り、棺におさめてあげました。お月さまは、ちょっと暗くなりましたが、まだそれほど目立ちませんでした。二人目が死んだとき、また四分の一を墓に埋めました。月はさらに暗くなりました。そして、三人目が死ぬともっと光は弱くなりました。ついに、四人目が死ぬと、お月さまは全部墓に埋められ、夜は昔のような闇になりました。村人たちは、ランプなしで夜歩きしては、互いに頭をぶつけあいました。

墓に埋められた、四つの月の断片は地下の闇の世界で再びひとつに合わさりました。すると、死んでいたものたちはそわそわし始め、ねむりから目を覚まし、ものが見えるようになったことに驚きました。彼らの目はとても弱くなっていたので、お日さまの光ではまぶし過ぎ、お月さまの明かりで充分だったのです。

死者たちは起き上がり、浮かれ出し、生きていた時のような生活を始めました。あるものは芝居見物や踊りに行きました。またあるものは居酒屋に出かけて酒を飲み、酔っぱらって、喧嘩して、ついには棒で殴り合う始末。騒ぎはどんどん大きくなり、ついに天国にも聴こえるほどでした。

天国の門を守っている聖ペトルスは、地下の世界で反乱が起こっているのかと思い込み、兵士たちを呼び集めました。その兵士とは、悪魔が天国に攻め上がって来たとき、それを追い返す者たちです。しかし、その兵士たちはやってこなかったため、ペトルスは自分で馬に乗って、天国から下の世界に降りてゆきました。

地下の世界にたどり着いた聖ペトルスは、死者たちの騒ぎを収め、再び墓に眠らせました。そして、お月さまを地下の世界から持ち去り、それを天につるしておくことにしました。

こうして、お月さまは、地上に生きているだれもが見上げることが出来るようになったのです。